

校内研究活性化プロジェクト研究通信

第3号 令和5年(2023年)7月7日発行



小暑を迎え日増しに暑くなってまいりましたが、ご機嫌いかがでしょうか。先進校の実践事例に学ぶため、6月14日(水)に昨年度の実践校(A中学校)の第1回校内研究会を参観させていただきました。校内研究の初回で、研究主任から研究主題の説明がされ、グループごとに取り組のテーマを決定されていました。校内研究主任の「教員一人ひとりが『自分事』として校内研究に取り組んでほしい!」という熱い思いとA中学校の先生方の「新たな教師の学びの姿」をお伝えします。



A中学校の 校内研究会

注目したポイント

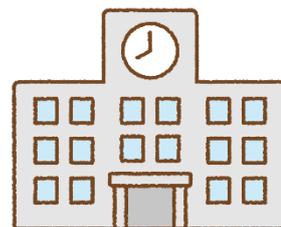
教員一人ひとりが校内研究を
「自分事」と捉える取組



A中学校に関する情報

- 学校規模 大規模(生徒数700人以上、教員数50人以上)
- 職員構成 若手が増え、中堅が少ないため若手育成に苦慮されている。特に今年度は、校長を始めとして職員が1/3近く(講師を含む)入れ替わった。
- 校内研究 昨年度、校内研究活性化プロジェクト研究の実践校として、G-0JTを活用して校内研究を活性化させてこられた。目指す授業や生徒の学びの姿である「A中スタンダード」を活用され、教員一人ひとりの強みや課題に応じた「共通実践」に取り組まれた。具体的な取組では、授業参観促進週間として「宝探しWeek」を設定したり、参観後に「サンクスシート」を授業者に渡す仕組み作りをされたりすることで、「共通実践」を自分の授業改善と結び付けて捉えられるよう工夫されながら実践に取り組まれてきた。

今年度の校内研究では、昨年度から校内研究主任を務められている教諭は、昨年度のノウハウを生かして転入者にA中学校の校内研究を理解・実践してもらおうと共に、生徒の変化から成果を見取ることを目標として掲げられ、校内研究の推進に臨まれている。



校内研究主任へのインタビューより

A中学校 研究主題

伝え合う力の育成

～A中スタンダードを基盤にして～

1. 校内研究の進め方

- ① 4月 「A中スタンダード」について説明し、これを基盤として授業改善を行う。「A中スタンダード」については右の二次元コードから『A中スタンダード』を基盤とした組織作り」を参照してください。
- ② 5月 自己分析シートを配付し、自分の授業を見返して、自身の強みや課題を把握する。シートの配付時期は重要で、実態把握ができて「困り感」が現れる頃を見計らっている。
- ③ 6月 同じテーマを選ばれた教員同士で、少人数のグループを編制する。グループで協働して研究主題に迫る。



2. 個人の課題を解決するための校内研究の役割

個人の課題を解決する一番の手立ては授業参観だと考え、重点参観週間(「宝探しWeek」)を設けている。そのうえで「授業アップデートシート」や「サクスシート」を活用して、まずは教員一人ひとりが主体的に授業改善に取り組むことのできる仕組みを作っている。また、全体会やグループ協議などの時間を有効活用できるように事前準備も余念なく行っている。

さらに、各グループで時間を見つけて交流できるように、グループリーダーに声を掛け、交流を促している。ただし、ICTを活用したり、全体会の終了時刻を守ったりすることで、多忙感・負担感を減らす工夫をしている。

3. 研究推進委員・グループリーダーとの役割分担

研究推進委員：各会の校内研究会で取り組む内容について、協議・確認する。推進委員会を開く前に資料を渡し、資料に目を通しておいてもらうことで、推進委員会は意見を吸い上げる場となるようにしている。

グループリーダー：実践交流、グループでの研究を先頭に立って進めてもらう。そのために、校内研究会の前日に招集し、当日の流れや目的を伝えることで、校内研究主任の意図を理解して分科会が進められるようにするなどの工夫をしている。

4. 校内研究活性化のポイント

昨年度のプロ研の中でも同じことが話題にあがったが、何をもって活性化したと見るのか省察が難しい。そこで、今年度、A中学校では、生徒の様子を見取ることを通して、取組の成果を省察できるようにしたいと考えている。そのためには、どの生徒をどのような意図で見取のかを学校全体で統一し、動画やワークシートなどを蓄積しようとしている。

例えば、1回の授業研究会について考えてみると、公開授業をして終わりではなく、日々の授業につなぐところが校内研究と捉えると、授業研究会は全員に還元される取組になると考えられます。

また授業改善を通して、児童生徒の様子が変わり、その変容を教員一人ひとりが授業の中で見取ることができれば、校内研究の成果が教員にも児童生徒にも還元されたと考えられますね。



全体会の取組

1. 管理職による、校内研究の価値付け

管理職の出番については、あらかじめ校内研究主任と相談し、「全員で取り組もう」という機運を高めるには十分な内容と時間が設定されていました（3分程度）。また、校内研究主任を全員で支えていこうというメッセージも伝わってきました。正に“全校体制で取り組む校内研究”だと感じられました。

2. 校内研究主任による、研究主題の共有と意識付け

「今年の研究テーマ、目にした（耳にした）ことはあるんやけど、何やっけ？」という経験はありませんか。A中学校では職員室の一番目立つところに、一番大きな文字で目標を掲示されているので、何もしなくても目標が目飛び込んできます。また、校内研究主任のインタビューの冒頭にもあったように「自分事」として取り組んで欲しいという校内研究主任としての思いもしっかりと伝わってきました。



職員室の掲示板の様子

A中学校の全体会は、単に研究主題とその理由を読み上げて終わりにせず、校内研究をみんなでよりよいものにしていこうという思いを醸成する有効な時間になっていたと感じました。校内研究主任と管理職の連携はもちろん、研究推進委員の先生方とも十分に打合せをされ、校内研究を「自分事」にし、一人ひとりが主体的に取り組める校内研究にしていこうとされていました。そういう気持ちは大切ですね。



分科会の取組

1. 個人の課題の共有

分科会が行われる日までに、教員一人ひとりが校内研究主題と「A中スタンダード」から取組のテーマを選び、個人の課題を設定されました。「自己分析シート」に書き込んだものを校内研究主任が確認してグループに分けられていました。グループで集まるのはこの日が初めてで、お互いに個人の課題は知らないの、グループテーマに向けた思いも併せて共有されていました。

2. グループテーマの作成

個人の課題やその思いを丁寧に聞き合うことで共通点を見つけたり、アドバイスをしたりしながら、グループテーマが練り上げられていきました。今後の実践に「自分事」として取り組むためには、このタイミングで一人ひとりが自分の思いをしっかりと話せることがとても重要なのだと感じました。

実際の通信では、分科会で協議する様子を写した写真を掲載しました。

分科会の様子

3. 個人の課題の再考

グループテーマの作成、手立ての共有ができた後には、個人の課題について考えたりまとめたりする時間が設定されていました。分科会後にインタビューしてみると、『職員室に戻ったら書いておいてください』と言われても戻ると書けない。会の終わりに書く時間があれば書けるし助かる。』という思いを話された先生もおられました。“教員一人ひとりが「自分事」として校内研究に向かう時間を生み出す”という視点からも、この5分間の有効性は計り知れないと感じました。

4. 分科会後のグループリーダー会

グループ間で情報共有することで、グループリーダーは他のグループの取組を参考にすることができます。情報共有だけでなく、電子データで確認することもできますが、校内研究主任として、各グループの思いも共有することで、今後の校内研究の方向性を考えることができるのだと感じました。



A中学校に参観に行くまでに、研究委員のみなさんから聞かれたキーワードのうちの 하나가「自分事」でした。この「自分事」について、校内研究主任は、『自分事』の出発点は“困り感”にあると思う」「自分が一生懸命になると『自分事』になると思う」と話されていました。校内研究主任の話をも、スモールステップに分けて考えてみると、このようなイメージではないでしょうか。

自己開示できる場を用意する

- 日々の授業の困り感をオープンに話す
- 解決したい課題＝自分の課題を認識する
- 自分の課題解決に向けて一生懸命になる
- 「自分事」になる



校内研究主任は、自己開示できる場を用意するため、グループ毎に別々の教室に分かれて分科会を行うようにされていたのだらうと感じました。時間の設定も、一人ひとりが十分に話す時間を確保できるように設定されていました。

このように考えると、校内研究主任が、教員一人ひとりに校内研究を「自分事」として捉えてもらうために行っている工夫は、他にもまだまだ見つけられそうです。

